北京劳动群众最早的游行

北基行 訳

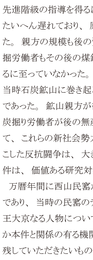
北京　天安門前広場　前門集ひの夜景

北京労働者はじめてのデモ行進

首都北京で生活する我々は、今日の北京に関心をもち、地域事情にくわしい。これは当然のことであるが、昨日の北京について知る者は、ざらにはいないだろ。過去のことを全く知らない人もいるが、これはすこし問題だ。北京の過去や、先人が封建制度のもとでみえないだ生活苦を知れば、今日の社会主義制度にたいする愛おしさがいや増し、労働者階級や先鋒隊――現在中国共産党が指導する社会主義建設事業に、一層熱愛の情が湧くだろう。今の中国と今日の北京の繁栄は、過去の歴史の中国と歴史的北京の延長線上にあるのだ。

今日、北京は近代的工業の一大都市に変貌を遂げたが、一昔前は、工場らしい産業はなにひとつない古い都であった。ここ北京で、労働者のデモ行進が繰り返されたことなど、もはや思い起こすことは出来ない。実はそれがあったのだ。遡かこ百五十八年前、紀元一六〇三年、当時明朝は神宗朱翊の時代であるが、大規模な労働者デモ隊が、北京街頭に、押し寄せたのだ。

一五九六年、即ち万暦二十四年、北京の西山門頭溝一帯にちらばる鉱山で、石炭の採掘が始まっていた。その後、盛んになり、官営、私営の業者が入り乱れた。明朝政府はすかさず税務官、鉱山税務官を派遣した。万暦二十六年頃、“西山煤監”の任命をうけた、太監（宦官とも呼ばれる）の王朝は、着任するや業者にあれこれ難癖をつけて金銭を巻き上げた。これが元とりの、五年目に西山をひっくり返す大騒動が起こった。我慢しきれなくなった、民鉱の親方と炭鉱労働者どもが、やむに止まれず、一六〇三年の春、ついに行動を起こし、明朝政府の封建的圧迫に反抗した。



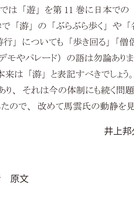
万曆帝（ばんれきてい）　明朝　第14代皇帝
廟号は神宗（1563年～1620年没）

関係する歴史資料によれば、王朝は神宗皇帝が寵臣の太監であった。彼が西山一帯で徴収した鉱税は、親方の負担能力をはるかに超え、民鉱業主は自分達の代表を選んで政府と減免を交渉することを決めた。選ばれたのが王大京という男で、彼は直接税額減免を訴えた。これに対し、王朝は一方では京営の軍隊を派遣し、武器を以て納税を督促し、もう一方では、偽の皇帝“聖旨”をかざして、王大京等を逮捕した。事件がここまで拡大すると、石炭生産に大きく支障が生じ、多くの鉱主が生産停止に追い込まれると、採掘工夫や輸送業者、石炭消費者の生活を脅かすようになった。彼らは針合し、群衆の巨大集団をなして、北京城中をねり歩き、声高に不当税制を訴え、明朝封建統治階級を震え上がらせた。

明朝『神宗実録』の記述より、当時の深刻な状況がよくわかる。“黨面短衣の人、街を填め、路を塞ぎ、掘を持して冤を呼ぶ。”“蕭墻（しょうしょう）の禍　四もに起き、産煤の地あり、煤を做（つく）る人あり、運煤の夫あり、焼煤の家あり、性命に関係し、畿甸を傾動せり。”

明朝の封建統治階級はこれらの労働群衆をたいへん恐れた。“一旦竿掘して起てば、輦轂（れんこく）の下、皆胡越と成る、豈念ずべからずや？”このような厳しい状況のもと、神宗皇帝はやむなく勅旨を下して王朝を召げ、かわりに陳永壽を煤監として派遣した。これは“暴を以って暴に易える”ことに過ぎず、状況の改善に何の役にもたたなかった。しかし、石炭鉱山群衆にしめした誠意は、明朝封建政府建設以来のはじめてのものであった。

当時の中国社会はなお典型的な中世封建社会の段階にあった。労働群衆の闘争は単独でおこなわれ、先進階級の指導を得ると同時に、当時の採炭は、まだ手掘りであり、原始的採掘方法により採炭された。親方の規模も後の資本家階級とは大きく違い、炭掘労働者もその後の煤鉱労働者の無産階級を形成するに至っていなかった。このような状況下であったが、当時石炭鉱山に巻き起こった事件は、画期的な事件であった。鉱山親方が後の資産階級の萌芽であり、炭掘労働者が後の無産階級の萌芽であった。従って、これらの新社会勢力が、当時の封建統治下で起こした反抗闘争は、大きな歴史的意義を有するのである。当時、北京を震撼させたこの事件は、価値ある研究対象であり、もっと多くの研究者の注目を集めなければならない。



万曆赤絵　五彩 松下高士図 盤鉢　直径 36.4 cm
（東洋陶磁美術館収蔵）

万暦年間に西山民窯が行ったデモ行進は、北京で最初に出現した労働群衆の闘争事件であり、当時の民衆のデモ隊は北京で最初に出現した労働者の集団である。惜しいことに、王大京なる人物についてまだ、手掘りとなる資料は見つかっていない。可能ならば、どうか本件と関係の有る機関、研究者にお願いして、調査をすすめ、後の事迹を史冊の上に残していただきたいものだ。

【 掘載当時の時代考証と秘められたメッセージ 】

「北京劳动群众最早的游行」ひとそえ

時は 1603 年、明朝 14 代の万暦帝、没後の廟号（諡号名）は神宗。老舗の琺布屋の名前も同じ、万暦赤絵の皿はときどき話題になります。豊臣秀吉へ万暦帝ゆずりの勅諭を出して効を奏せず、第二次の朝鮮出兵に繋がったということでも時代のイメージが聴こみます。

その時代にも北京西山で労働争議があり、明朝政府派遣の徴収官の横暴圧政に反発した民営石炭鉱主や掘り手・運び手などが帝都の北京市内で「游行」をしたという話です。

「游」「逝」は通用されることも多く、諸橋大漢和辞典では“逝”を第 11 巻に日本での「あそび」の語（逝里・逝客など）を主めて、第 7 巻で「游」の「ぶらぶら歩く」や「各地を巡る」語（游学・游説など）を載せています。「游行」についても「歩き回る」「僧侶が諸国行脚する」とあり、現代中国語での示威行動（デモやパレード）の語は分論あります。藤沢市の時宗「遊行寺」や野球の「遊撃手」も本来は「游」と表記すべきでしょう。本文の背景にある要点は「官」と「民」の関係合いにあり、それは今の体制にも続く問題であることは言わずもがなです。言葉遣びで紙幅を費やしたので、改めて馬震氏の動静を見定めてから官と民について綴ります。

井上郁久

北京劳动群众最早的游行　原文

我们大家生活在我国的首都北京，对于北京的今天，人人都很关心，人人都很熟悉，这是很自然的，也是完全应该的；而对于北京的昨天，知道的人就比较少，甚至有的人简直对过去的事情很不了解，这是一个缺点。其实，对过去的历史了解得多一些，能够体会我们的先人在历代封建压迫下怎样过那痛苦的生活，就一定会更加热爱我们今天的社会主义制度，更加热爱我国工人阶级和它的先进锋队—中国共产党正在领导我们进行的社会主义建设事业。因为今天的中国和今天的北京，乃是历史的中国和历史的北京的一个巨大发展啊！

今天的北京已经可以算得是一个现代的工业城市了；然而，历史上的北京却根本没有什么工业，因而，在一般人的印象中，似乎北京在历史上也决不会出现劳动群众的队伍。殊不知，事实并不是如此。远在三百五十八年前，公元一六〇三年，当明神宗朱翊钧统治中国的时候，在北京街头上，就已经出现了大规模的劳动群众游行的队伍。

原来早在一五九六年，即明代万历二十四年，北京西山门头沟一带的煤矿已经被开采了。从那以后，北京西山的煤窑不但有官办的，而且有私人经营的，明朝政府派了税官，专收矿税。到了万历二十六年，有一个太监名叫王朝，充当“西山煤监”，大肆敲诈勒索。他一连搞了五个年头，简直把西山闹翻了。许多民窑的业主和煤窑的劳动者们忍不可忍，不得不联合起来，于一六〇三年的春天，采取行动，反抗明朝政府的封建压迫。

据有关的史籍记载，当时的煤监王朝是神宗皇帝宠信的太监。他在西山一带摧索矿税，超过了民窑的负担能力，于是，民窑业主推举了一个代表，名叫王大京，出面交涉，要求减免税额。王朝一面选派了京营的军队，以武装摧索税款；一面假借皇帝的“圣旨”，把王大京等逮捕起来。事情闹大了，煤窑生产受了很大影响，许多窑主停止了生产，挖煤的窑工和运输的脚夫以及烧煤的人家都受到了威胁。他们终于联合了起来，形成了巨大的群众队伍，到北京城里游行，呼冤请愿，使明朝封建统治阶级大为震惊。

明朝《神宗实录》中叙述当时的情况十分严重：“黨面短衣之人，填街塞路，持冤呼冤。”“蕭墻之禍四起，有产煤之地，有做煤之人，有运煤之夫，有烧煤之家，关系性命，倾动畿甸。”（身内から起きた禍が四方に広がり、関与する者は、石炭鉱夫、洗炭夫、石炭運送夫、石炭消費者等で、命に係わる事件で、王が文配する畿甸、即ち全国民を震え上がらせた。蕭墻之禍：　身内、国内など身近な不和、事件を指す。“蕭墻”：家庭、官邸の門と建屋入口にたてた、目隠しの壁面）明朝的封建统治阶级很害怕这些劳动群众“一旦竿而起，輦轂之下，皆成胡越，岂不可念？”（人民が一旦竿を掲げて起てば、天子のおひざ元の人民が、みな胡、越のような野蛮人になりきれず、心配国りなし。輦轂之下：“輦轂”、は天子の乗る車。）在这样严重的情况之下，神宗皇帝不得不下旨撤回王朝，另派陈永寿为煤监。虽然这不过是“以暴易暴”，没有根本上改变情况，但是这毕竟是明朝封建政府对民窑群众让步的一个表现。

当时的中国社会还处于一种典型的中世纪封建社会阶段。劳动群众的斗争得不到先进阶级的领导。那时候的煤窑还是用非常落后的原始采掘方法开采的，窑主们还没有形成为象后来的资本家那样的阶级，窑工们也还没有形成为象后来的煤矿工人那样的无产阶级。然而，当时煤窑的出现毕竟是一种新鲜事物，那些窑主们毕竟是后来的资产阶级的前身，那些窑工们也毕竟是后来的无产阶级的前身。因此，这些新的社会力量，在当时封建统治下所进行的反抗斗争，是具有重大历史意义的。当时轰动北京的这个事件应该引起我们研究的兴趣。

历史应该承认，万历年间西山窑民进城游行，是北京最早出现的劳动群众斗争事件，当时的窑民队伍则是北京最早出现的劳动群众队伍。可惜我们还不知道那时的王大京等是什么样的人，如有可能，希望有关单位和专家能够进行一些调查，让他们的事迹更详细地载入史册。